

## あとがき

本書は、主にここ5年ほどの間に行ってきた研究を改めて見直し、学術の世界で重要な位置を占めるようになった利益相反問題について平易にまとめたものである。

本文でも触れたが、バルサルタンの事件の影響は大きく、日本の臨床研究の信頼性が大きく揺らいでいる。公益に資する大学が全ての人々のためではなく一部の企業の収益の増大のために契約を締結するにはそれなりの厳しい制約が課されているが、一昔前に比べれば、たがが緩んでおり、その隙間に入り込むように利益相反問題が時に大きく世間を騒がせている。

まだ日本では利益相反マネジメントが初期段階にあり、透明性を確保する開示システムの導入も遅れている。また、計画を修正させたり利益を放棄させたりなど、個別課題に適切に対応してマネジメントできる人材が極めて少ないことも懸念される。

一方で、大学は、元来、「社会と国家がその時代の最も聡明な意識を展開させることが出来る場所」であって、「無条件の真理探究がどこかにか成り立っている」ということは、人間の人間としての要求に他ならない」（ヤスパース『大学の理念』（理想社、1999）という理想の環境を具えているべきである。こうした学問の自由が保障されている唯一残された場における問題に適切に対応できる人材は今日明日には育たない。研究者の自覚とルール形成は極めて重要である。

そのルールも社会状況に応じて時に修正を加えながら見直していくことが求められる。これはここで完成、というわけではなく、常に動いている。また、今後も継続的な調査研究が必要な分野であり、動きも速いものであるが、利益相反全般に関してまとめた日本の出版物がほとんどないこともあり、特に米国において、PHSのNEW RULEが発表され、サンシャイン条項が施行された機会に本書をまとめてみることにした。本書により読者が基本的な知識をもって関連情報に接することができるようになれば望外の幸せである。

末筆になるが、本書の企画・刊行にお世話になった筑波大学出版会を始め関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成27年3月

新谷 由紀子